

「一冊の本と一本のペンが世界を変える」編集手帳、読売新聞 2014 年 10 月 11 日朝刊を読む

編集手帳

電車にはねられて九死に一生を得た志賀直哉は書いている。＜自分は死ぬ^{はず}だったのを助かった。何かが自分を殺さなかった＞（『城の崎にて』）

◆人はみずからの意思でこの世に生を享^うけたのではないので、自分が何をするために生まれてきたかを知らない。あの大地震もそうだったが、生命にかかわる災厄を経験して「生かされてある」、身を天に感謝した人だけが、授かった「使命」に気づく

◆マララ・ユスフザイさん(17)に今年のノーベル平和賞が贈られる。イスラム武装勢力に銃撃を受けながらも屈せず、女性が教育を受ける権利を訴えつづけているパキスタンの少女である

◆「一冊の本と一本のペンが世界を変えるのです」。昨年、国連本部でそう演説した。銃と因習の支配下に暮らす多くの人々を受賞は勇気づけるに違いない

◆とはいえ日本流に言えば、まだ箸が転んでもおかしい年頃である。小さな肩に「使命」の荷物は重たかろう。情も理も通じない者を相手に命の危険もつきまとう。＜旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子はぐくめ^{あま たづむら}天の鶴群＞。荒野に旅立つ少女に、万葉集の一首をはなむけとする。

[コメント]

パキスタンでイスラム武装勢力に銃撃されながらも女性の教育権を訴えた 17 歳のマララ・ユスフザイさんにノーベル平和賞が与えられることが発表されたことをうけての読売新聞朝刊のコラム「編集手帳」は、約 800 字、原稿用紙 2 枚に志賀直哉の「城の崎にて」や「万葉集」の一節をちりばめ、マララさんの活動を紹介した名文。

— 2014 年 10 月 11 日 林 明夫記 —